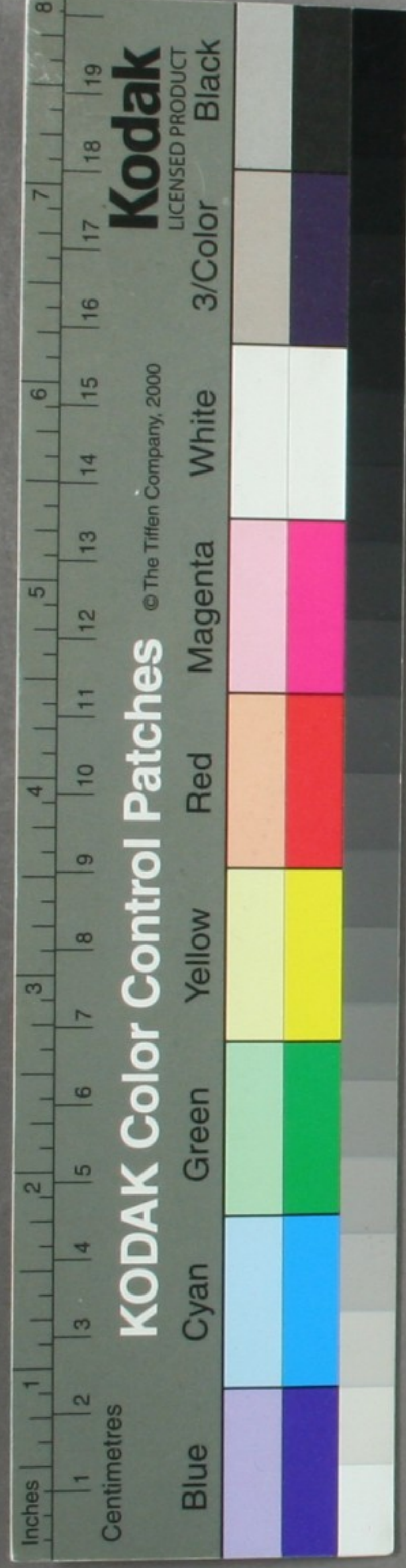
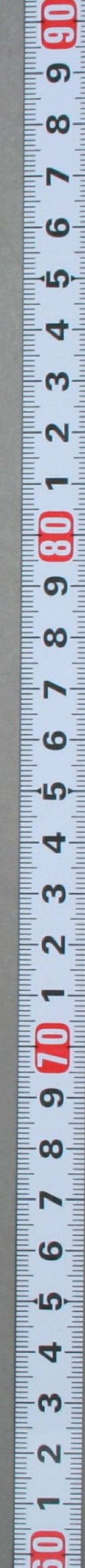




特別
467
2





和漢船用集卷第二

目錄

舟船之字義

九号之事

船艘之事

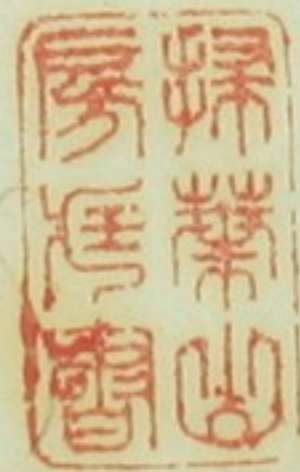
舟用禮格之事

舟造用木之事

舟船飾之事

棹歌之事

舟王神并船菩薩之事付船神之事



和漢船用集卷第二

舟船之字義

金澤兼光編集

舟船

舟職流切音周
船重圓切音椽

釋名曰舟言周流也船言循也循水而行也楊氏方言
曰自關而西謂之舟自關而東謂之船風土記曰小曰舟大曰
船字彙云舩許江切音香俗以為船字誤也
本邦訓といふは舟舩の差別なり日本書紀
神代卷より富孫の和語振也布禮と訓はふね
ふれ同音也又振ハ不留也是天神より饒速日尊
十種の瑞宝授ふるふ布留のゆゑの不留也

法と用と干陰陽の教は成といふ家あり或人同舟と
丸と云ふ人のふくみとてに細長なりあるを渾
圓方なりと云ふや蓋し曰城郭の丸と云ふあり
や方なりと南隅なりと云ふも天地の法なり
あるは丸二の丸二の丸或ハ何の丸と云ふ舟の丸を
稱する者ハ半月の丸と云ふ半月舟の丸と云ふ舟
半月の象と云ふと天と渾一なりと渾するなり
万葉天の海は雲は波は舟の舟星の林は舟なりと云ふ
曰
その海月の舟は極極なりと云ふ舟人おとこ
舟の四舟の渾なりと云ふ又白晝易く渾なり湖渾玄孤
舟月劉得仁の渾は夜深斜舫月といへる舟と云ふ渾

舟と云ふは渾なり渾と云ふは舟なり半月と云ふは舟なり
ハ細長なりと云ふと云ふといふも渾なりと云ふは渾なり
なりハ渾なり渾の法と云ふ渾なりと云ふは渾の利也

艘セキ隻之事

艘

字彙曰舟總名曰艘ソウ説文曰船數也搜同徐鉉曰
船總名云校廣雅曰吳曰編李虔通俗曰晉曰船
と云ふ一艘二艘と云ふ舟の教今用ふなり又隻と
書日本紀天智天皇七年秋七月新羅王輸御調船
一隻順和名抄眉公雜字船隻門と云ふ渾は鳥一
牧也凡物單曰隻武備志隻又兵船一枝と云ふ
又雙と云ふハ兩隻也舟の數はハ不用古文前集は

漢舟一葉と化ちりわるは一葉の舟と云ふ小舟一
艘と云ふちり或ハ一帆と云て一艘は用百舵と云
て百艘は用又翼と云けり文選は千翼と云ふ周翰は
曰翼ハ艘也凡舟の數ハ隻翼の字と用ひてハ帆と
水多に比して浪波ハ弱しやうんことと歎き也

舟用禮格之事

天子造舟

諸侯維舟

大夫方舟

士特舟

連四船曰維併兩船曰方單船曰特造舟為梁者

即今浮橋也文王所制周世因之遂以為天子之禮
爾雅曰庶人桮拊拊ハ維木以為渡也又古法
舟ハ木と云ふりさる附ちるへ一或書ハ周赧王始作
浮橋と云ハ張り之赧王ハ周の三十七世文王とハ八百年の
後より始終の遠り造舟の事と毛詩大明は象以てんえ
と云ハ文王の創り舟と云ふ事と云ふハ舟の形ハ載天子
の舟と云造舟と用ひる事と云ふハ舟の形ハ載天子
の舟と云發渡河白魚躍入王舟是周の武王孟津を渡り舟白
魚武王の舟の中へ入是神代と云た事と云ふ白魚未食便
と云ふ事と云釣渭の歌ハ惟肖る句ハ白魚未食便
叔餌留躍嗣王河上舟

知りてお面の舟を造りおと祖来先生 鈴塚録
造るるくう八握うけ一舟より八十握扱舟より
立於撃鼓の扱あり船乃多か船制の法船營の式
ありて其船各其品をふへき者也

舟用木之事

素戔鳴尊曰杉及櫟樟此兩樹者可以為浮寶
櫟樟ハ楠カれに和名を布ふる事と健右ハ其
ふなり今云楠なる一神代の木を楠と云ふる
淳室ハ船なり杉楠二本ともにあはれくちぎ
船の材と云ふきことと教ふ事なり所謂天
盤櫟樟船也

神功皇后三韓御征伐の御舟楠よて造りしめたま
長門の國より木此處ハ材木の出くる所故に名あり
長サ十餘丈大さ十圍小なりたる楠木なるより
つるより船を造りて強き故漢舟鐵刀木と云杉
ハ爾雅音義曰似松生江南可以為船材矣
本邦にも南方に生ずるを良材と云肥後日向純
明の材と云上と云
倭古今
能州河せきうに倭に材木此へあに神のゆれふる
萬葉
海くも我きられし舟もやまのりるる能く舟
姫小季吟の曰能州山の本よて造りし舟なりけふ
のあて造りし舟ハ凡波能あしと四地は有るなり

太上天皇

昨又傳フタニタと云々古事紀云曰在放尾張之相津
二侯相作二侯小舟フタニタと云々又八雲所抄フタニタ原田
みひふフタニタとあるハ檣舟なり

武備志曰日本造船ツクル與中國異必用大木取方相思モトヒチキリシメヲ
合縫不使鐵釘惟鐵片不使麻筋桐油惟以草塞罅ツカフテツクキヲタテツクハシ
漏而已ロウヲ名短ミナ費切甚多費材甚大非大力量未易造ミヤカニヤスコウヲ
也又云造船亦用松杉之類ヒラといふ凡船の材サイと
へきものミツと云々といふとも海河をふとふといふ海河ハ
去水也ミツ朽クナやとキなるも松と上ヒシと云々楠柏ナハシ松
是又次松板又云は次けりミツそ外ミツ又松皮の松

と下品と云海舟ハ船板フネイタ朽クナと云々楠ナハシ板イタを布フ梅ウメ板イタ板イタ
を用サウホクそ外サウホク雜木サウホクを以サウホクて造サウホクれりサウホク俗サウホクにサウホク船サウホクの縁サウホク起サウホクにサウホク案
乃ハクシウうハクシウはるハクシウ舟ハクシウなりハクシウ船ハクシウの篇ハクシウなりハクシウ竹竿ハクシウの草ハクシウ又
松舟ハクシウなり

秋の田コギと云コギ此川コギに漕コギをコギたれコギもコギと云コギ松の川コギ舟
泊セイサイシヤカのセイサイシヤカ昔セイサイシヤカ者セイサイシヤカ我セイサイシヤカ采セイサイシヤカ菽セイサイシヤカの二篇セイサイシヤカに楊ヤマデ舟ヤマデなりヤマデ或ヤマデハヤマデ妙ヤマデ崇ヤマデ舟
木モクラン蘭舟モクラン桂舟ケイ等ケイを材ケイと云ケイ云々ケイ日本モクラン紀モクラン推モクラン古モクラン天皇モクラン二
十六年遣河邊臣モクラン安藝國モクラン令造船モクラン至山モクラン覓モクラン船材モクラン便
得好材モクラン以名將モクラン伐時モクラン有モクラン人モクラン曰モクラン霹靂木モクラン也モクラン不可伐河邊臣
曰其雖モクラン雷神モクラン豈逆モクラン皇命モクラン耶モクラン多モクラン祭幣帛モクラン遣人夫モクラン令
伐則モクラン大雨雷電モクラン之モクラン爰河邊臣案劔モクラン曰雷神モクラン無犯モクラン

夫當傷我身而仰待之雖十餘霹靂不得犯河邊臣即
化少魚以挾樹枝即取魚焚之遂脩理其船ホミラと云へり
又東國北國は船材多くあせり草花と云る津輕
南部も云ふ船材多し小國はかきりなり

と云ふたうけり山小船材きり本にきりよけりて船材を
日旋改め

と云ふて船本きりて船中の船山々ふれハ本立
去けーとていく代作ひり

俗説は曰ふは必そと船の本をいへ海上の惡魔除よ
まると何者うと云へーとん悪うもなる人ー舟の古ハ家
屋の材より人ー家屋の材新といへとも船に用ゐる
をー是をいへる人ーとて船とハ獄門磔の本と云

是をわーおハ海上の惡魔除よとて世俗を説き
舟方の老ハ却々ちりて船中の序りていへ利根と云
以木玄虚海賦曰若其負穢臨深虚誓愆祈則有
海童邀路馬銜當蹊と云とてり是標を負給て還就
袂佛は船中よりいへりてありありと海中神快のそと
りりてや不心の穢き船とて惡魔よけふはりて
一と災を求る人ーとて船を信むべー

舟飾之事

船

字景曰舟飾船同万多又布奈可射里とよめり
雜記は曰漢成帝以沙棠木為舟以雲母飾於鸕首
一名雲舟又削大木為龍形夾雲舟而行又唐玄宗

帝銀鑊キムロクの小舟は多しと云ふなり 本朝景行天皇
統紫の御幸又仲哀天皇神功皇后御幸の時五百
枝の賢木と舳艫スナヅカは立三種の神宝とかけ素幡シラハタと立
しあり又舒明天皇四年唐國使人高表人等到于
難波津則遣大伴連馬養迎於江口船三十二艘及
鼓吹旗幟皆具整饬と云へり西都賦曰浮鷁首ウヰササヘ
雲芝ウニシ蜚翟ヒテキ葆建羽旗注曰船頭象鷁鳥厭水
神故天子乘之画芝草及雲氣以為船覆飾也又曰
登龍舟張鳳蓋建華旗祛繡帷鏡清流注曰龍舟ハ
詔と云ふ多く鳳蓋ハ蓋の名華旗也繡帷ハ繡帷也
又子虛賦曰浮文鷁揚旌棧張翠帷建羽蓋といふ

華旗ハ彩旗なり羽蓋ハ鳥の羽を折く舟旗といふ
義と云ふなり人々と云ふと云ひまうち云々なり
と云ふなり季吟曰舟小立一旗吹風舳艫スナヅカは旗なり
かさりしありと注せり陰難刀弓矢炮臺タカ筆立筆
吹貫旗幟ハタなり錦官舟ニギハヤヒなり明律考ゴウ
帶一條龍順風旗ハタ大いなる風を馬祖旗ウマソノハタ
旗あり 本邦市舶は舟と云ふなり舟の紋を舟丸と
係込て幟と云ふは禮義と云ふ漢にも係込るなり
後述征伐は白石臺基有敗赤船士民皆謂亮時物と云ふれ
陰和の事ありと云ふなり又秦池は虚山上有池神人
常乘漆船于其内今有故漆船在焉と云ふなり客越志

2 遊^{ユウ}船^{セン}大小皆黒^{シロ}猶^ナ是^{ナニ}南宋^{ソウ}遺^{ウイ}制^{セイ}といふ

本邦陰船の品欄々本朱紅粉うゝま陰花陰酒陰
かき合陰^{アハセ}子ヤニ陰ホウリ小舩陰小早或ハ丹を以て彩^{イロドリ}
魚々者伊達小又と孫^{タテ}以万葉^{シヤウ}赤る保舩佐丹陰^{アカノソホヲコサニヌリ}
舩希羅小舩とよわり漢は畫船^{カハセン}紅舩彩畫舟といふ九
舩に漆^{ウルシ}こと飾^{カサリ}のこまけり一ハあをもちきて疾
しと要^{ヨウ}に二ツハあ垢^{ニツアカ}を拂^{ハラフ}て腐^{クサト}さうんことを欲す唐
史小曰杜亞淮南^{トアワイナシ}節度たり時氏競渡とあると亞その
舩の輕駛^{カルクト}うんことを欲して乃舩座^{フナソコ}は髯^{ウルシメスル}と云へり万
葉櫓皮是れ多^{カニハニキツク}舩のは不見安曰櫓皮の色にいづとり
いづ舩也八雲津抄ハさうくハまきうづ舩と云へり

其德を比しるゝ云々のあり
 一説小曰舟玉神ハ正親者也又聖徳を子画しるゝ
 舟玉の親者ハ如云猶親者云云と写し一義と舟玉神
 と云ふことハ云々海王及舟と云々の後の佛跡とて舟
 菩薩と云ふ如也如智カ云々三十三所又愛カシ
 たり云々云々と云々云々云々云々云々云々云々云々
 經者門云々云々

經曰若為大水所漂稱其名号即得淺處又曰為
 求金銀瑠璃碑磔碼碼珊瑚琥珀真珠等寶入於大海
 假使黑風吹其船舫飄隨羅刹鬼國其中若有乃至一
 人稱觀世音菩薩名者是諸人等皆得解脫羅刹之難

聖德太子三十歲御製作



弘誓深如海 歷劫不思議

以是因緣名觀世音

又曰或漂流巨海龍魚諸鬼難念彼觀音力

波浪不能沒

後平元はたき湯督源尊氏公弘誓深如海の文を説ふ
よめる

つるも此原き抄のつるもきたれとかる法のふり

抑觀神とも八千平二十八都の其一つとて四都すや八都

菩薩の画像と自画と船の舟玉ふきとおさせ終と

いづり舟玉と八箇のつるもとて

本邦舟の中央は其神と安座す異邦はまゝとて船

効法に及み船橋と菩薩堂と云

西川氏の曰長勝はまゝ唐人船菩薩と号するハ舟一媽

祖なり媽媽とも号し福建與化の林氏の女大海

は没して神と衣神異靈現つる後海の船と號

天妃此号と溢流又ハ聖母と号し觀音の化身とい

つる有船觀音を信する者多しとてつる和漢の

觀世音と云ふ菩薩と云ふなり

御那代碎編は曰天妃ハ莆田の林氏都巡る季女なり

幼して玄玄の道理よくあひつるに福福とある家

何れとて三十年宋の元祐の年遂に歿るなり祠と州里

は達至元中にあると海軍より萬戸合忽魯

楷等奏して廟と立ち天妃と号し大宰と稱てある

洪武の初海運風より一飄泊一程米穀を万石
んとする時より万人号泣して死を欲する大に天妃は祈
附小風より舟楫してつねいつくことを得る後又照應
徳正靈應孚濟聖妃と封せし海舟の應驗一を以て
曰方恩と云々人窮なり又宋の宣和年中は使を
齎る遣一團の商人を被る彼中流は風は逆折ふ
てまぬらふことを得るなり彼者其事を報す
よめは婦を祝あり元は海運と有故はを祝とおは
と司馬溫公の白水は陰教なりと神まされ女子と其
理或は云々

又曰薩摩の國野間橋現ハ則姥媽神也野間ハ則姥媽

の和音なりといふ本朝故事因縁集は曰薩州野間御
崎明神ハ唐王万里傳に仁王の像を立て末世にあり仁王の面
赤く如く時傳滅はると云傳ふ時は悪人ありて仁王の面を
朱くし像をよみ傳ふ事況ん人皆溺死をい時神
舟二艘あるはちく薩州野間の底にありたぬハ松
尾神社と現し舟の中は神と成り異國に於ての船
風は逆波の時ハ立死に成りたぬハ松
又關帝菩薩は蜀の關羽也又大道云々神を教に衣
冠漢唐の儒者官人の形像の云々其傳を云々又諸
葛武侯を教に又張天師を教に云々又
紀の貫之云々作日記

ワラモレチウの神にたむけす麻の追風やまた吹かん
沼小ちふりといふありのこころいふや又云隠岐の國にこ
そ知事利勝といふおれりてこのまことさういふおれられ
舟出さとしてその神を奉幣してワラモレといふこと
隠岐國一の文知事郡中良始大の神といふ名和氣須比神
と云へりてこのまこといふは是なりへり

日本後統は曰延暦十八年又月御海國の使内藏宿祢が
麻呂等飯粒の日海中夜々といふて云々云々と云へりては
火の光もそ光を尋ていふは漢巴の意れと向へ隠岐國知事
と云ふは云々云々麻呂は雲神といふて是れいふ云々高
賈のとも云々云々て海中と云ふ時火の光を云々云々

これよりてまこと云々云々云々云々云々云々云々云々
神の祐助といふも云々云々一日これと云ふは天照皇を
神と云々云々一日て今よおと海船源実をまぬく云々
神火の光よりいふ云々云々云々云々云々云々云々云々
後統の國風浪云々云々海と云ふは守護の神なり神功
皇后二韓退治の時海神といふ云々云々云々云々云々
此の神の時よりいふ神に云々云々云々云々云々云々云々
乃知事利勝といふ云々云々云々云々云々云々云々云々
おと云々細雲の手具を以て神璽と云ふ云々云々云々
守護の神也

風浪大権現

日本紀云底筒男命ソコツバヲミコトナカ中筒男命ナカツバヲミコトナカ表筒男命ウラツバヲミコトナカ是即住吉大神矣纂疏曰住吉三神而攝州曰四座則祀神功皇后之靈矣住吉之名者神功皇后時此神言曰眞住吉之國也因鎮座其地名曰住吉モウシチヲマスミヨシ云

弟一天照太神

弟二宇佐明神田矛姬命

弟三表筒男命 中筒男命 底筒男命

弟四神功皇后也とてんくし

續古事類西の海ありきつれ海よりなりきつる神
万葉ふりけきもゆじうきすもの人乃あひひとく

ふひれへはうしをきたすひつきたすひ下畧

又曰すもの人れはうおほきうきふひのふひしをきたす

ふひのふひとたちいさうてうきうきん下畧

住吉を神海上を守るふひの神祇

ふひのふひも我は海を海のと波風たふしのれふ人

是れより海よりなりきつれふひの神なりは海風波

のふひと神なりは海風波のふひと神なりは

大海神振別住吉振社大海をふひとて海を守護

の神なりは海童のふひと中華のふひとて

木玄虚海賦曰若其負穢臨深虚誓ナガサキ愆祈則有海童

邀路馬銜當蹊又郭景純江賦曰海童之所巡遊と

又神書に曰 又えつりては海童ハ海神也

底津少童命 中津少童命 表津少童命

少童 是とれ多たると云海神也

薩州額姓郡渡海神牧聞の神社と号す

祭神 猿田彦命

佐渡國渡海社より五十猛命と云

備後國沼隈郡鞆は渡社より

祭神 舟玉神 實ハ猿田彦神

神功皇后征代三韓時於此浦調船具兵具用鞆為

神璽祠舟玉神自此呼此地曰鞆

攝列住吉の攝社舟玉神も別猿田彦を神之地神代
塩土老翁と現し老翁と云ふと云ふよりし目高間
の小子と造りたす入る所神は海よりハ先玉神と
もなり

万葉

佐賀の海は海童の風と云ふ猿田彦も云ふなり

神乃木

舟玉の玉と云ふ所の麻をねて海童といふもふりてそなり

云の海童の舟と云ふと云ふなり海童の舟ハ舟と云ふ

云舟とハ舟と云ふ人の名なり先玉とハ舟と云ふ

と舟と云ふ神のこゝなり是を舟と云ふと云ふなり

三箇男令云ふいす一御合神と云ふ舟と云ふ

三箇男令云ふいす一御合神と云ふ舟と云ふ

なみそのなり

船神之事

天鳥船神

舊事紀曰復生神名鳥之石楠船神亦本謂天鳥船神

古事紀曰次生神名鳥之石楠船神亦名謂天鳥船

日本書紀神代卷曰生鳥盤椽樟船船亦二神之所化

生也 河内國岩舟山は岩舟大明神なり

或書曰天盤椽樟舟玉姫婆珊婆演底守夜神増穂

大和三國船神の傳ふ天竺よりハ波那波守夜神支那より

ハ唐宋このころ金銀菩薩と船神といふ舟玉姫

のころ神書は是をアムル當曼白記は曰天神七代の附

天盤椽樟舟玉姫其姿を愛し船となりて天降りて

地神の姫なりとあり是下照姫天盤船よきく操舟の

神天降りてとあり御流し神の姿を愛し船となりて

神書は云補船と生ともも同なるなり天盤椽樟舟玉

姫と云ハ舟玉神と云ふハ船神也

抑舟神と女神と云ふハ船ハ雲本坎水は成る故に船神曰雲

為本為風為長女是船神と女神と云ふは其の理也

又神下箇立候式女のも道具に船の具ハ早掛常置船

又神は鏡録に載る供物者十二を備へ天地の

舟方表は曰其神なりと像をいふと云ふハ船神の

神舟玉と云ふは是なりとありそ者瑞々として

ホタキク 室をとおして 海中鳴初す後ろくを無收患那所
ホタキク 中風ぬの歌を知るとり 是神靈のあまねく又うたへり
ぶかりけり
万葉集遣唐使は 後ろくをうたへり かのあまねくをうたへり
れへふもひきまきとてあつちのあはれをうたへりやまき
あおほふもたふひさうのあまのこもあまのこも
そへふもひさうのあまのこもあまのこも
たらぬねもよきとてうたへり かのあまねくをうたへり
よめり

海流いつれの神をたむけはる かのあまねくをうたへり
凡日本大小は神祇二神のそへふもひさうのあまのこも
モロホシ

達成ハ水神 罔象女 黒龍王 龍神 龍女 百千万眷屬 守
護たまひん 公 堅固 正直 正路 三元 加持
らへい 申す 聖武天皇 御教は 水のこへ 地性 かく 船のこへ
床は 座さる ところ どの とも 入る かん 是 法華 經 本
事 亦 後 水 如 地 と 親 たり 入る かん 一 あり 神 佛
加護 あり かん や

和漢船用集卷第二終

4 年 3 月



